

やまだ ようこ著

『ことばの前のことば』
ことばが生まれるすじみち1

(新曜社 一九八七年)

森下 みさ子

赤ん坊と母親の間には「我」も「汝」もない。二人が共存する心理的場所に風はおこり、共有する「今、ここ」の空気をふるわせて、互いに響き共鳴する活動が生じる。人はその生を、人と共に「うたう」心地良さから開始するのだ。これは、根源的な愛の形である。にもかかわらず、子どもはそこに安住しない。その快楽を捨ててまで、物の世界を認識する活動に積極的にのりだしてゆく。ただし見落としてならないの

は、そうして新地に向かう好奇心の原動力は、根源の愛に支えられているということだ。そしてまた、獲得された物の世界の認識も、人との「うたう」関係をより複雑に多彩に生きてゆくために用いられるということである。ここに、決して階段状の蓄積物では描けない「発達」の真の姿、すなわち失うものと得るもの、無駄と獲得が、相即的に作用する場が開けてくる。著者は、その根茎状の広がりの中から「ことば」をすくいだしてくるのだ。子どもと共に居る母である観察者の指先によって……。だから、この本は充分に知的であるばかりか、美しく優しい力を秘めている。それは、発達のあらゆる面を見つめ、それを見守りつつも言述してゆくことの悦びと痛みを知っているためである。

(お茶の水女子大学)

